

「世界最小新聞社社長」

「ユマニテ」紙に登場した高田博厚（1939 年）

高橋 純

日本人彫刻家高田博厚は 1931 年にフランスに渡り、1957 年に日本に戻るまでの 26 年間でヨーロッパで暮らした。その間に邦字新聞を独力で起こし、その新聞発行は 10 年近くに及んだとは本人の言であるが、それが事実であるとするならば、日曜日を除いて毎日発行されたと伝えられるこの日刊新聞の量は膨大なものに違いなく、フランスにおいて日本語で発行された貴重な歴史的資料となったはずである。しかしこの新聞は残念ながら現実には一部も残存していない。

この「世界最小の新聞社」がいかにして「設立」され「運営」されたかについての経緯は高田の回想によれば以下のようなものである¹。

「ある日、淡徳三郎が突然訊ねてきた。はじめて会うのだが、彼の名は知っていた。京都大学の赤化事件三・一五裁判で、林房雄と共に闘士だった。投獄されているはずだがそれがどうしてフランスに来れるようになったかは知りもせず、訊きもしなかった。「松尾邦之助への紹介状をもらったので、彼に会ったが、当てにならぬので、不意にあなたを訪ねた。これからフランスで食っていきたい」。三年以上もいて未だに食えない私に、そんなうまい手は考え出せなかった。「僕に三千フラン残っているから、それを元手にして、邦字新聞を出したらどうですか？ いっしょにやってくれませんか？」以前石黒敬七や松尾邦之助が在パ邦人相手にガリ版刷りを出していたが、与太もので続きはしなかった。「日刊にして、まじめなものを出せば……」と淡は言う。私は躊躇したが、日本大使館に相談に行った。補助金をせしめる野望からである。参事官の三谷隆信を個人的によく知っているのので、彼に会った。

¹ 高田博厚著『分水嶺』1975 年、岩波書店（引用は岩波現代文庫版[2000 年]から。pp.197-200）。以降、同書からの引用については、本文中にページ数のみを示す。また、人名等の固有名の表記については、今日通用しているものと異なるものが見受けられるが、高田の記述を尊重して、原則変更は加えないこととした。

[……]

そこで三谷参事官に新聞発行の件を話したら、「結局、お情けちょうだいものになってしまうのではないかな。大使館として補助金は出すけれども……」日華事変が始まり、極東は不穏になりだしたが、日本からの情報はフランスの新聞にはほとんど出ない。国際新聞協定でフランスのアバス通信社には沢山電報が入る。日本新聞特派員はそれをもろう権利があるが、一般には出せない。『同盟』パリ特派員の井上勇が、内緒に私たちにくれることになった。毎日井上の事務所に電報を取りに行き、日本語にして、こんにゃく版²で印刷し、それにヨーロッパ事情解説と末尾に「フランス小^{イストワール}咄」を連載した。『日仏通信——Le Quotidien Franco-Japonais』と名付け、記事の訳を淡がやり、ガリ版書きは私がやったが、一日三時間ほどの労働で済む。私のアトリエが発行所兼印刷工場、二頁で六、七十部刷り、個人購読料月五十フラン、商工社百フラン、大使館補助金四百フラン、日曜以外の日刊新聞。ところが声価大いに上がり、一ヵ月しない中に基礎が固まり、淡と私は公平に収入を両分して、食えるようになった。その中に読者はフランス国内だけに止まらず、ソヴェト、ドイツを除くヨーロッパ各国、さらに東はイスタンブール、南はエジプト、チュニジア、アルジェリア、モロッコに及んだ。深みにはまりつつある日本の情報を知るばかりでなく、緊迫してきたヨーロッパ事態をも伝えたからだろう。——小十年に亘るこの膨大なガリ版新聞が保存されていたなら、記念碑的文献になっただろうが、発刊していた当時は読めば捨ててしまう紙屑のように思っていた。これがフランスの新聞記者の耳に入り、おもしろがって、大衆紙『パリ・ソワール』（今の『フランス・ソワール』）、ばかりか、堅い『ル・タン』（今の『ル・モンド』）、『フィガロ』など全紙が、「世界でいちばん小さくて、いちばん高い新聞」と書いた。『ユマニテ』などは挿絵入りで、「ちょんまげ」の私が机に坐って「新聞」を書いている。そして、私を外国新聞協会の会員にしてくれた。愛嬌のある話だから満場一致で推せんしたのだという。『日仏通信』の高い評価のせいで、当時の満鉄支社が淡を買いにきた。支社長の坂本、所員の渡辺、秋吉、成田たちをよく知っているが、「満鉄」に左翼人がかなりいることを承知しているだけに、私はすすめなかった。彼には範疇的共産主義思想と、「一元方程式」性格が共存していて、生一本であること自体が、自他を裏切るに至ることを、私は感じていたが、やはり彼は雇われてしまい、『日仏通信』は私ひとりの事業になった。爾来在パ邦人間での私の仇名は「社長」ということになった。なるほど、パ

² 寒天版とも。寒天を煮て平板に凝固させ、染料で書いた原稿をこの版面に貼付して転写させ、寒天の吸収した染料を白紙に転染して数十枚の複写をとる印刷法。版がぶよぶよしたこんにゃく状なので、この名がある。

リで役職を持つ日本人でも、皆支店長級で、本当の「社長」は私だけである。下には秘書も手伝いも二、三人はいる。——パリに來た武者小路実篤は約一ヵ月私のところで食事していたが、「新聞」の発送をも手伝ってくれた。——そして約半年ばかりは、「新聞」を離れた淡に従前どおり収入の半分を頒けていた。それほど楽になったのである。一ヵ月一万フラン以上。これが私の「境遇」に変化を起こした。」

高田はルポルタージュを意図したわけではなく、客観的な記録や資料を参照することなく、ひたすら自己の経験を反芻するように回想しているので、時には時間的間隔を無視するかのようには事象の展開が語られる。それゆえに、「小十年に亘る」この新聞の発行期間を見渡すと、高田の記述には極私的にミニマルなものと歴史的にマキシマルなものが混在している。それを第三者が読めば、どこからどこまでが本当かと疑わしくなる記述でもあると言われかねない。ましてやこの『日仏通信』は当時フランス在住の日本人相手に世界情勢に関わる非公式情報を提供する半ばもぐりの新聞として発足した。そしてその新聞が歴史的に存在したという事実の痕跡は一切失われたというのだ。失われてしまった理由は考えられる。ナチスによるフランス占領中もパリに住み続けた高田だが、1944年8月にベルリンに移動させられた際に、私財は一切フランス政府に没収されてしまった。2年半に及ぶ流摘からパリに戻った際にも、書籍類は返還されたものの、書簡や私文書類は返されることはなかった。それゆえに高田の手元にはこの新聞の存在を物語る物証は残されなかったと理解される。そうすると高田の証言は「真犯人しか知りえない秘密の暴露」に等しく、その事実（秘密）を証明する物的証拠が伴わない限り、信憑性のない創作とさえ見られかねない。

とはいえここには事の真偽を明らかにしうる手がかりはある。当時パリで（そしてフランスで）読まれていた主要紙がこの『日仏通信』の社主の話題を記事に取り上げたというのだ。創刊一月で基礎が固まって、販路はヨーロッパ周辺にまで広がり、これを耳にしたフランス人記者が記事にした。高田は時期を確定して述べていないが、創刊は、淡徳三郎が日本の思想犯保護団体大考塾の特派員として渡仏した1935年だろう。他方、フランス共産党機関紙「ユマニテ」は、独ソ不可侵条約締結を機に1939年8月にフランスで発禁処分を受けることとなったため、高田が証言する「記事」が「ユマニテ」紙に掲載されたとすればこの5年の間であるはずだ。そしてそれは事実そのとおりだった。以下がその証拠である。

1939年2月3日の「ユマニテ」第8面。この頃の日刊紙「ユマニテ」は最

終ページ（6面か8面）に「パリ・郊外」と題する欄を設けて市井の雑多な情報を伝えていたが、そこにしばしば「パリの手仕事様々」というコラムが現れ、テイラー、靴職人、パン屋等々の職人の技が、そこに世相を反映しつつ紹介されている。そのコラムのひとつに、「世界最小新聞社社長」という肩書きで高田が登場したのだった。

LES PETITS MÉTIERS DE PARIS

LE DIRECTEUR DU PLUS PETIT JOURNAL DU MONDE

Un ancien jardin au fond de
Touffers, où les arbres prennent
des proportions énormes, parmi les
maisons et les toits de feuillure. Des
arbres écorchés, sans racines
au-dessus du sol, la terre s'in-
clinant de l'autre côté, sorte de pa-
raquet immense dans le ciel.

Vous Héroïque Parole, le directeur du plus petit journal du monde, peut donc d'homme sans mystère, dans ses crimes terribles. Mais pourquoi-nous de politique internationalité? Pourquoi la souffrance criée le visage de Taché. On a l'impression que ce petit homme a le fer de testé avec facilement qu'une œuvre de la boîte de l'humanité dans le cœur de sa main. Comme une sympathie, la terre tourne dans la mort de Taché. Il y a une avec la boîte. Le spectacle dardé qui se joue actuellement sur le globe attire au dérouler sous nos yeux. Le visage de Taché resplendit inimitable.

— La terre est une sorte d'orange indéchirable. Si nous touchons nous la partagez, nous nous rendons ridicules et cette poignée d'individus qui font remuer continuellement des milliards d'hommes, de femmes et d'enfants pour assouvir leur insatiable de pouvoir.

Boudou Talata suit, par complicité, qu'il n'est pas nécessaire d'un homme. Son journal, écrit dans une zone géographique si vaste, est un bel exemple de ce qu'on peut accomplir comme ça par la presse.

Il a écrit : « Les gens accablés d'adresses pour indiquer de naïve relationner, avec eux, une

discours de lecture sont à Paris : les autres personnages les plaient, sont éparpillés dans le premier volume et les autres. Ils sont par ce journal même japonais, uniquement pour des raisons, quel rôle nous Tobin par rapport aux cinq parties du monde.

Fakela, qui est en même temps le traducteur de Romains Holland au Japon, lui, fait ce journal.

Barthe de Romaia Rodrad et de sa femme, d'Alain, de Charles Villard, de Tristan Remy, de Léontine d'Hironima Takata.

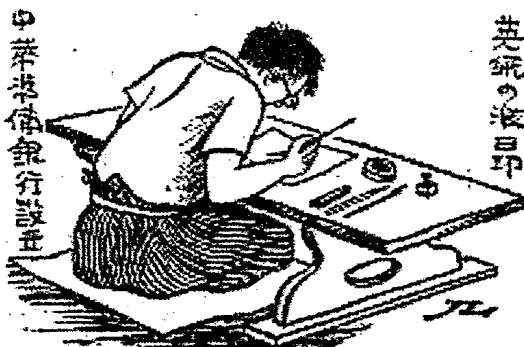
En parlant des cigarettes, Tachibana préconise au sujet de spectacles : théâtre, cinéma, musique, exposition d'art et, dans la même rubrique, l'adresse de deux ou trois restaurants japonais à Paris, de For mings de poisson cru, Tachibana aime.

進軍の要目
 なるをまたと不祥事件
 出でるは
 出でるは

L'écriture japonnais
comprend ainsi de
trente à quarante mille
signes. On ne peut
avoir de les connaître
tous. Mais pour ceux qu'on
rencontre n'indiquer l'ordre de
la lecture on ne peut s'accommoder.
On ne peut donc aucune transcrip-
tion dans le langage nippon.

Dans la simplicité de son harmonisation primitive, le peuple japonais ne s'imagina même pas qu'il pourrait avoir, à un certain moment de sa classe et lui aussi, selon la forte expression de Chénier-Louis Philippe s'adressant à Barrès.

Albert FOUENIER.



TAKATA rédigeant son journal

Il assume le rôle de directeur responsable. Il ridique, corrige les constructions, corrige, inspire, les Rimes parfois obscures d'une secule sténographique par ses propres images. On pense à Balzac frémillant ainsi dans le petit rue Pissarro pour imprimer les lettres et par une autre coincidence, comme pour l'heureux, qui nous permet même d'évoquer son nom. D'instinct est également amateur. Des modèles sous leurs yeux d'articles, des livres de jeunesse, des, magnifiques, des études... et les

Humanité 1939/02/03 p.8 (部分)

当該記事が掲載された 8 ページの紙面全体の図版は本論末尾に示す。

パリの手仕事様々——世界最小新聞社社長——

ヴォージラール街の向こう奥に古びた庭園があり、奇妙にねじくれ

た木々の合間に大理石や裸婦像の彫刻が点在している。そこには芸術家たちがアトリエを構え、庭をまたぐように通路が渡され、明かりに照らされたその建物のファサードは夜陰に浮かび上がる大型客船といった格好だ。

ここに高田博厚がいる、ガラス張りのキャビンにおさまった世界最小の新聞社の社長だが、「変哲もない男の端くれ」である。で、われわれは国際政治でも語り合おうというのだろうか？　すると高田の顔が苦しげに引きつる。どうやらこの小男には、全世界をオレンジ一個と変らぬ容易さでその掌に収める力量があるようだ。まるで小さな地球儀のように、現実の地球が彼の手のひらの上で回っている。彼が球を弄ぶ。すると、現に今地球上で繰り広げられている野蛮な出来事が、あたかもわれわれの眼前で展開していくかのように見えるのだ。そして高田は再び無念無想の顔に戻る。

——地球は、切り分けることのできない一個のオレンジだ。それを我々だけの仲間内で分け合おうとすれば、我々もまた、おのれの権力欲を満たすために日毎幾千の男子、婦女子を死に追いやっている一握りの山師連中と同類になってしまうだろう。

高田博厚は経験に学んで知っている、一個の人間たるために、山師じみた冒険などするには及ばないと。平和目的で作られた彼の新聞は、封書にして毎日夕暮れ時に郵便か航空便で発送されている。百人そこそこの定期購読者で持っているこの新聞は、他に比べればかなり高い。十数名の読者は在パリだが、その他は、いずれも有力者たる人物で、世界の大都市に散っている。彼らはみな、日本語でもっぱら日本人向けに編まれるこの新聞を通じて、世界の五大陸を相手に現在東京がいかなる役割を演じているかを知ることができるのである。

日本においてはロマン・ロランの翻訳者でもある高田は、わずか一人でこの新聞を起こした。

彼が社主という立場である。が、彼は編集し、字を組み、校正し、自分で工夫したタイプ用紙[ガリ版]を通常版にしてロネオ印刷³するのだ。ヴィスコンティ小路で同じような仕事をしながら自分の本を作っていたバルザックに思いが及ぶ。そして、さらに別のもっと幸運な出会いと言うべきか、我々には容易にロダンの姿が連想される。高田は彫刻家でもあるのだ。濡れた布を巻かれた複製像、見事な裸婦のトルソー、あれこれの習作、そしてロマン・ロラン夫妻の胸像に始まり、アランの、シャルル・ヴィルドラックの、トリスタン・レミーの、レオン…の胸像が高田の素質を…⁴。

³ ロネオ(Ronéo)は本来回転式複写機の商標名だが、謄写版印刷の代名詞のように用いられる。ここでは高田が「こんにゃく版」と呼ん出いるものを指しているのだろう。

⁴ この文の末尾の数語（おそらく当該列の節の最終行前の一行分）が脱落している。

絶えず煙草をふかしつつ、高田は、演劇、映画、音楽、美術展覧会の興行広告のページを整え、同じ欄にはパリで刺身が食べられる和食レストランの所在地を二三書き加える。終始極めて物静かに、高田は電話に応じ、世界各地の都市から届く電報を開封する。愛用の鉄筆で彼は日本語の表意文字を組み合わせ、細密画家もかくやとページの上から下まで描き上げてゆく。象形文字のおのおのがそれぞれにひとつの意味を持っている。木が二本並ぶとハヤシ[bois]を意味し、モリ[forêt]は三本の木で示される。山に人が掛かると隠者[仙人]を表す。一人の女が二人の男に挟まれる[嬬]と強姦や姦通を意味するといった具合である。

日本語の表記には三万から四万の字が使われる。普通人はそのすべてを覚える前に死んでしまう。しかしどの記号も、どの象形文字も、自由とか、週に一度の休息といった観念を表すことがない。こうした言葉は日本語の中ではまるで意味がないのだ。

生来の無知ゆえの単純素朴なる日本人は、シャルル＝ルイ・フィリップがバレスに対して放った強烈な表現によるところの《階級感情》というものを、自分たちでも持てるのだとは思ってもいないのだ。

アルベール・フルニエ

この記事には、高田が回想録で語っていた『日仏通信』の販路拡大の事実が、第三者が取材して確認した情報として伝えられている。当該コラムの名にふさわしく、邦字新聞の作成過程が高度な技の手仕事として紹介されると共に、「賢者」風の高田のプロフィールや漢字文化の一端がユーモラスに伝えられている。高田が、「ちょんまげ」姿で机に向かう自分の挿絵と記憶していたのは間違いで、実は「ざんぎり頭」の書生だったことは、遠い過去の記憶に刻まれた印象としては等価だと言ってよいだろう。

本当は初めから存在していたのだが、『日仏通信』の痕跡は失われたという断定の背後に隠されたままになっていたこの記事の（再）出現は、回想録『分水嶺』の読者の意識に変異をもたらさずにはいない。それは、『日仏通信』刊行の「小十年」間にわたる高田の回想の記述に何を読み取るかという点で変異が生じるということである。高田が関わったとされる事実がどこまで本当であったか確定できぬままに読者は、高田の記述から、歴史的な事象を前にした傍観者の主観的な思い入れや感想を聞かされている印象を受けるはずである。しかしこの記事の出現は、高田が「暴露」する「真犯人し

か知りえない秘密」が客観的な「真実」であったことを裏付けるものとなる。要するに読者の「読み方」が変わるのだ。このことはとりわけ、ナチスによるフランス占領期の高田の行動と思索を巡る回想の記述について言うことができるだろう。

その一つ（『分水嶺』XI、「占領されたフランス」、pp.263-265）を見てみよう。この一節を読む（再読する）読者は、当時の新聞記者高田の言動を『分水嶺』の記述から知るしかなかったのに対して、これまた高田自身による報告としてしかこれまで知られていなかった「ユマニテ」の記事が「歴史的事実」として存在するのだという認識を踏まえた時、そこに述べられている事柄の、いわば「創作性」と「真実性」の境界が大きく変る印象を持つはずなのだ。

「私は「世界最小の新聞」の社長だから、戦前から外国記者協会の一員にしてもらっており、戦争になると『同盟通信』の雇いにもなったから、定期の「記者会見」にも時折顔を出したが、敗戦までは「東部戦線異状なし」だったから、なにごともしなかった。私の仕事といえば、共同本社に送る井上や入江の電報をフランス語にして検閲所に届けるぐらいのものだった。ところが敗戦となったら、日本記者団は動揺しだした。アバス通信社はドイツ占領軍によって改組され、その一部を借りていた『同盟』事務所も立ち退き、入江啓四郎は自宅を事務所にし、井上勇はニューヨークに転任した。『朝日』の事務所があった「ル・ジュルナル社」は地方に逃げてしまったから、渡辺紳一郎も自宅へ引越し。『ル・タン』社——今の「ル・モンド」紙——の前に大きな事務所と美人の秘書を持っていた『毎日』の榎本桃太郎は「僕はイスタンブールに転任するから、あんた後を引き受けてくれないか」と私に頼みに来た。『読売』の松尾邦之助もやがてストックホルムに移ったが、これら日本記者団はあまり仲が好くない。敗戦でパリ行政がドイツ軍司令官の手に移ると、外国記者協会も改組される。そこで日本記者団はその代表者に、「中立地帯」の小新聞主の私を選んでしまった。そして新たに出来た外人記者団にはアメリカ記者は二十人近く、ソヴェト記者も三、四人いるが、枢軸国が「戦勝者」だから、協会会長はイタリア人の記者、そしてその次の副会長には私が選ばれてしまった。日本人だからで、この記者団の中で私の本職を知っている者は一人もいなかった。松尾は間もなくパリを去り、『読売』の後を、満鉄支社にいたハンガリー人アルフレッド・タインに頼み、また『満州国新聞』の嘱託という名義で淡徳三郎が加わり、後は渡辺と入江が残っていたが、入江はドイツがソヴェトを攻撃する寸前に、シベリア鉄道で日本に帰った。そしてボルドーで戦争継続を主張したレイノオ政府が国民議会

で敗退し——戦争を主張した議員は八十名にすぎなかった——ペタン、ラヴァル政府が成立、ウンシジェル將軍[Charles Huntziger 陸軍大将]が軍使となって、休戦協定が調印され、フランスが北の占領地帯、南の非占領地帯と二分され、新ペタン政府がオーヴェルニュ地方の温泉地ヴィッシーに出来ると、私は『毎日新聞』記者として、パリとヴィッシーを兼任することになり、月に一度は汽車でヴィッシーに出かけることになった。日本大使館もそこに移る。堀口大学の弟が『同盟』社のヴィッシー詰めで来たが、間もなくスイス駐在の小島亮一と交代した。こうして私は「心ならずも」、ジャーナリズムの世界、というより戦争時代の錯綜する情報世界に踏み込むことになり、しかも「私自身」は変りようがなく、「反戦」であり、とりわけ「反三国同盟」であったから、その渦中に入って、思いがけぬ務めを果たすことになった。それから占領期の五年間、柄にもない外人記者協会副会長であり、しかも同盟国日本人であったから、それを利用して、外人記者団の「独立」を守り通すことに役立った。——五年間しばしばドイツ当局と喧嘩したが、当局は私を除名しなかった。戦争後判ったことだが、当時のナチス政権下の彼らの大部分は、表面だけの「ナチス」だったのである。——それから、戦争中常に最も正確な情報を得ていたヴァティカン法王庁のパリ支所と不断に連絡を取っていたこと。そして、私の友人たちのほとんど全部は抵抗派^{レジスタンス}に加わっていたから、それとの連絡を持ちつづけていたことであつた。」

この一節の読者は、「枢軸国」ナチス・ドイツがフランスを占領したことによって外人記者協会が改組され、計らずも高田がその副会長となったことから、「戦争時代の錯綜する情報世界に踏み込むことになり」、「その渦中に入って、思いがけぬ務めを果たすことになった」彼が、一ヵ月一万フラン以上を手にする『日仏通信』の成功を振り返って、「これが私の『境遇』に変化を起こした」とカッコつきで境遇の変化を語った真意を遡って正しく理解することができる。この新聞の成功によって、食うや食わずの生活レベルが一挙に上昇したということ以上に、被占領下のフランスの、戦勝国側の外国人記者という立場から、レジスタンスの側とも連絡を取り合う、傍観者（記者）の位置を超えて行動者の立場に移ったのだった。この変化は、とりわけこの回想録の読者にとっていかなる意味を持つだろうか。

回想録の言葉とは、筆者（体験者）の記憶の中に残されたいわば写真のネガとして読者に提示されている。筆者にとってそのネガは、自らの「経験」の光を当てるとかつて体験した事実がポジ（再現されたありのままの姿）としてよみがえる仕掛けとなっている。しかしその「経験」を共有していない

読者は、そのネガが過去の事実を敷き写しにしたものであるか、それとも回想する今の時点で作られた（歪曲あるいは創作された）ものであるかを判定できない。要するに、筆者によって語られたことの真偽の決定不可能性の中に宙吊りにされた状態に置かれ、筆者の「経験」（つまりポジとして再現された経験）を共有することはできないはずである。そこで、読者が、筆者が語る「事実」の真偽決定不可能性から脱することができるようになるためには、その「事実」が生起した時点での当事者としての筆者のアリバイ（ただしここではその現場不在証明とは逆の現場存在証明）が成立しなければならない。そうでなければ、その回想は、読者にとっては、後年（つまり事後的に）筆者が自らの「経験」から作り上げた「詩」ではありえても、決して「真実」として理解も共感もできはしないだろう。こうした認識に立つて考えるならば、1939年2月3日付「ユマニテ」紙8面に載った「世界最小新聞社社長」の記事は、回想録『分水嶺』に語られた、新聞記者高田博厚による、彼の滞仏中の、とりわけナチス・ドイツによるフランス占領期の高田博厚の行動をめぐる優れた現場存在証明となっていることが確認できるのである。

そして、以下に引く3つの抜粋はいずれもが、この行動者（新聞記者高田博厚）が体験し、その後30年以上経て明かされた「真犯人」しか語りえぬ「秘密の暴露」である。その言葉のうちに、件の「ユマニテ」の挿絵入り記事を発見したわれわれ読者は、筆者の「詩」（記憶錯誤も含む事実からのずれや創作）のさらに奥に、筆者の経験の「真実」（ポジとしての事実を蘇らせる経験の光）を感受することができるはずである。

1. 『分水嶺』XI、「占領されたフランス」、pp. 279-282

「ヴィッシーがペタン政府の首都になったので、日本大使館もその民家を借りて移った。そして館員もナチス派に固まってしまった。沢田大使は帰国し、原田健参事官が代理を務めていたが、これは影の存在にすぎない。駐スイス大使になっている三谷隆信や田中耕太郎、大沢章らと同時代、つまり第一次大戦後の国際連盟成立期の人間だから、自由思想の洗礼を受けており、よしんば「保守的」日本特質である「皇室中心」になっても、狂信的ナチスにはなれない。ことに原田は長い間同志社大学の学長だった原田^{たすく}助の息子で、——私は中学生時代、この原田学長から同志社の神学校へ入って将来牧師になるようすすめられたが、二、三日考えてみて断った。——温厚な人物であるが、一等書記官や二等書記官はナチス・ドイツ以上のナチスで、原田を馬鹿にしてい、「あなたには解りっこないですよ」と、人前でも無視してい

た。二等書記官のほうは当時の外務省で新ナチスの新進三羽鳥と言われていた一人で、二・二六事件を起こした若い軍人たちと交流して、「さくら会」の一員だったらしく、パリに着任すると、私がどんな人間か知らず、ただ人柄に引かれたらしく接近してきた。「ヒットラーの『我が闘争』は僕にとっては聖書だ」とはなはだ初に言うので、私はからかう気で、「左であろうと右であろうと、スターリンという男はヒットラーが及びもつかない、たいへんな奴だよ。狂信の甘さの代わりに鉄みたいに冷たく堅い人間だよ……戦争に勝つ負けるの賭はともかく、辛抱強さで勝つ奴だ……」と言った。日本大使館にはやがて加藤大使が新任してきた。これは東洋、中国方面の外交官で、「東洋」流の人物で、はじめて会った時私は「これは人物だ」と感じた。向こうもそう思ったらしく、「高田というのは新聞記者くさくなく、おもしろい人物だね」と言ったというが、あたりまえである。ヴィッシーからパリに出てきて、グルーズ街の大使館へひとりで出かけた。前庭に立って館を見上げている風采の上がらない男を見付けて、門番のアンリが「もし、もし。あんた、なんの用ですか？ここは日本大使館ですよ」とききとがめたら、「私はそこの大使だよ」と答えた。私が『毎日新聞』の記者になり、はじめて淡徳三郎と共にヴィッシーに行った時、彼は一席宴をもうけてくれたが、その時は政治情勢など話さず、ばか話ばかりした。隣りの原田参事官が「君、大使と話しているんだよ……」と私をたしなめたが、彼もまだ私を知っていなかった。——原田はその後、駐ヴァチカン法王庁の初代公使に転じたが、戦後、パリにやってきて私と会った。その頃は私が何者か理解していたらしく、戦争中の日本外交官のナチス信仰を互いに語り合った。そして私が三十年ぶりに日本に帰ったら、ある会合に出てきて、「あなただけに会いたくて、出て来た」と言った。「私は昔、あなたの御父さんに牧師になれって、大いに口説かれたことがあるんですよ。牧師にならなくてよかった……」「へえ、そうですか。僕もあまりまじめなクリスチャンではなかったからな……」と彼はほがらかに笑った。[……] ——加藤大使は、日本軍がシンガポールを占領した時、在パ邦人の「祝賀会」のためにヴィッシーからパリに出てきたが、式後大使館の若い連中と飲みに出、夜間邸に戻って、三階の寝室の窓の鎧戸を開けようとして、雪の積もった中庭に落ちてしまった。空家同然の官邸だったから、誰も気付かず、ほとんど凍死だった。彼の部屋には脱いだ衣類がきちんとたたんであったという。私が官邸に駆けつけた時には、彼はボージョン病院に運ばれてすでに亡くなっていた。正式の葬式はヴィッシーで行う。私もパリを発って列席した。その頃ヴィッシー・フランス政府は、ダルラン提督が首相で、抵抗派の巣窟だった。インドシナに日本軍が無理に進駐して、日本を憎悪している。それでも交戦国ではないから、大使葬式には儀仗兵がつき、ダルラン首相はじめ列席した。

日本側は大使館員六、七人と民間人の私一人だけ。加藤大使には気の毒なほど「形」だけの礼儀で、これも戦時中の挿話のひとつだろう。

ナチス信奉の二等書記官はイスタンブールに転任したが、私の『日仏通信』——その頃は秘書の沼沢に一切委せていた——はあそこまで行くので、その記事に我慢がならなかったらしく、パリ大使館に「高田に抗議しろ」とさかんに言ってきたらしい。結局、妻子を連れてパリに留学生として来ていて、パスカルを研究している人物が、非常時とあって外務省官補として現地採用された。私もよく知っている真面目な人物だが、私を呼んで、「高田さん個人としてなら、なにを書かれても言うことはないが、新聞という公器だから、日本の方針に反するようなことは書かないでください」と、言いにくそうに言った。これで議論してもしかたがない。「承知した」と答えて、その次に「君は今外交官だが、ずっと外交官たからでいるつもりか？ パスカル研究は続けてやるのか？」とすこし性悪に訊いたら、彼は眼を伏せてしまった。[…]

2. 『分水嶺』XI、「レジスタンス」、pp. 285-287

「占領下の新聞報道機関というものはただの名目だけで、いわゆるジャーナリズムが存在する本来の意味は持っていない。フランスが占領地帯と非占領地帯に二分されると、パリで発行される新聞は全部協力派コラボラシオナリストのものになった。だからフランス人一般はロンドンからのBBC ラジオ放送を聞いていた。禁止しても聞くので、雑音で妨害したが、それでも懸命に聞く。占領期間フランス人のほとんど全部はヴィッシー政府のペタン元帥とロンドンの「自由フランス」のド・ゴールとは暗黙の了解があるものと信じており、また事実、当初のヴィッシー政府は抵抗派レジスタンスの巣であった。——ヴェルダン攻防の英雄ペタンの名は皆が知っていたが、ド・ゴール大佐は誰も知らなかった。——

パリの外国記者協会もドイツ宣伝省の統制下に入り、毎日記者会見がシャンゼリゼの宣伝部で行われるが、若い人の好い部員がドイツの広報を読みあげるだけで、それに対しては誰一人質問しない。「新聞記者」の誇りと権威をもって、「広報」など信じていないのである。私は副会長の肩書きは持っているが、きわめて「不真面目」で、太平洋戦争が始まる以前から、私が日本の『毎日新聞』本社に送るニュースはほとんど新聞に載らなかった。——それだけに、本当のことを知りたい連中はさかんに私に接触してきた。だから、むしろドイツ大使館の方が私を警戒しているのを承知していた。私は情報連絡者として、以前から『毎日新聞』の囑託だったステファン・ローザンヌと、パリ大司教・枢機卿シュアールの政治顧問ルッソーとを持っており、とくにヴァティカン法王庁は最も正確な情報を入手していたので、私も他

よりも早く正しい情勢を知ることができた。日本軍のインドシナ侵攻などは、日本大使館が驚くほど早く知った。またミッドウェー海戦の結果もいち早く承知していた。ヴィッシーにいる日本海軍武官はわざわざパリに出て来て、在パ邦人を集め、図まで描いて「日本大勝」を宣伝したが、私ばかりでなく、パリにいた日本人は狂信者でないかぎり、真相を知っていただろう。ドイツがロシアに攻撃を始め、大進撃したのがレニングラードとスターリングラードの前で食い止められ、「冬将軍」に出くわした後は、おそらくヨーロッパ各国ではドイツの勝利を疑いだしていた。日本の陸軍武官は私としばしば会って情報を交わしていたが、ヨーロッパ駐在の日本武官は定期的に会議を開く。議長はもちろん「勝者ドイツ」駐在の中将の日本武官で、——ドイツにいる軍人たちは、大島大使はじめナチスの狂信者であった——他の武官たちが一致して悲観論だが、特にフランス駐在の大佐がそれを言ったら、「負けた国の武官がなにを言うか」と叱りとばした。「なにも、俺が負けたのでもないのに……」と彼は不平をもらしていた。——「戦争」という過酷で厳密な計算と駆け引きの要る事態になると、かえって愚かな盲信者が出る。「存在理由」をそれだけにしか託されないのである。——ドイツ軍のロシア大進撃が「冬将軍」で凍結してしまい、翌年春を待って再攻撃が始まるものと情報界も予想していたが、私は再進撃は不可能と予断していた。外人記者間では私の得る情報が正確だと信じられており、そのせいか、パリに常住しているヒットラー直属の秘密特使が私に面会を求めてきたことがあったが、私は断った。」

3. 『分水嶺』XII、「レジスタンス」、pp. 302-304

「戦争状態の下で、よしんばジャーナリストとしても、第三者的公平な立場を守ることは困難のようである。自分の主義やあるいは金で買収されて協力派になった者は別として、大体は「二重芸」を演っているようで、はじめの中は識別できないが、その中にいわゆる「勘」で感じられるようになる。日本記者団——と言っても私と淡とタインの三人だけ——は特別待遇で、ヴィッシー政府パリ代表のド・ブリノンと定期会見を毎週開いたが、これも一向はつきりせず、情報は一つも得られなかった。——彼は人間としては正直者だったらしく戦後の「協力者裁判」でもナチス信奉者だったことを隠さず、結局死刑になった。——私はヴィッシー兼任だったから、月に一回はヴィッシーに行き、オテル・アンバサドゥールを定宿にした。スイスからヴィッシー詰めになった小島亮一にそこではじめて会ったのだが、その頃のヴィッシー政府は抵抗派の「二重芸」の場だったし、その記者団もパリのそれとはちがっていた。私は彼らと自由に語り合い、ドイツに勝目がないという私の判断をも隠さなかった。ある時小島が「あまり率

直に話すと日本大使館側がむしろ神経質になっているから……」と忠告してくれた。——こういう時、「国家」という枠を超えて、「自分」を示すことはむづかしい。——しかしこのようなヴィッシーに対しドイツ側の締めつけがだんだん激しくなる。——傍から見てみると、年増芸者に惚れた若僧が、愛想を示したり嚇したりしている光景であったが、やがてウェーガン將軍やダルラン提督がアフリカに逃げ出す。ペタンが老人の頑固さでがんばっており、ラヴァルを追い出す。しかしドイツに脅迫されてまた彼を戻らせる。私はヴィッシーでペタンの記者団との会食に参加したことがあり、また、ローレーヌ州の首都ナンシーへの彼の巡行に同行したことがある。あそこのスタニスラス広場を埋める群集に向かって老人はしゃべった。「以前からあなたたちに会いたかったが、占領軍が許してくれなかった。アルザス州のストラスブールまで行きたいのだが、あそこは今のところ当分ドイツ領になっている。……私はどんな時でもあなたたちと共にいたいのだが、今しばらくの辛抱だ。勇氣と信念を持ち続けていただきたい。——その時上空をドイツ飛行機が三つほど飛んでいた。——ごらんなさい。あのように私の邪魔をする。」群集は歓声をあげる代わりに、息をつめて老人のしゃがれた声に耳を傾けていた。元帥と私たちとの会食の時間を待ちつつ、市役所の一室にたたずんでいたら、彼の侍医で策士のメネトレルが入って来て、さかんに私にお愛想を言う。元帥の演説の記事を書かれては困るからであろう。私は彼の肩を叩いて笑った。「だいじょうぶですよ」。彼は私が記事を書かないと理解したのか？それとも「この人間はだいじょうぶ」と判断したのか？おとなしく部屋を出て行った。」

もはやこれらの高田の経験談を客観的な事実として証明する物的証拠や証言を探すには及ばない。そもそも高田は事実を証明する目的で回想録『分水嶺』を書いたのではなかった。自らが通過してきた様々の過去の時間を振り返り、それぞれの経験の瞬間に、自分がどのように在ったかを見つめなおす意図から書かれたのが『分水嶺』である。読者はそこに歴史の「事実」と高田の経験の「真実」を対比しつつ読み進めることができれば十分ではないだろうか⁵。

(小樽商科大学教授)

⁵ そうした思い入れから、本論（報告）の後半は、ナチス・ドイツによるフランス占領時代の体験を回想する高田の記述を羅列的に引用するかたちとなった。また、そこに現れる沢山の固有名については、引用者（高橋）にとって既知の人物、高田の記述を通して知った未知の人物、当時の留学生で現地採用された外務省官補「パスカル研究者」と名前が特定されていない人物、それらすべてが歴史的に再確認可能なもので



Humanité 1939/02/03 p.8

あるが、一般的な表記と隔たりが大きい「ウンシジェル将軍」(＝アンツィジェール陸軍大将) 以外は注記を加えることを敢えてしなかった。